

生き方について考える

佐藤 紅音

要旨

大学に入学してから、講義や個人的な経験を通して自分の考え方や価値観が 180 度変わったと言っても過言ではない。その大きな自分の兄のセクシュアリティに関する出来事、この授業で考えたことなどから、今後どう生きていくのかを模索中である。

1. 自分を変えた出来事

3 年前の夏、5 歳上の兄から手紙が届いた。それは彼自身がトランスジェンダーで、FtM（身体が女性で心が男性）であることを打ち明ける内容であった。物心がついた時から違和感を持っていたと言うから、20 年弱も家族に言わずに過ごしていたことになる。成人式では振袖を着ており、小学生の頃から「女子サッカー」をしていた。兄の手紙からは、不安そうな様子がうかがえた。「受け入れてもらえるのか」という不安である。私自身は、トランスジェンダーであると聞いても衝撃など何もなかった。生まれたときから一緒に暮らしてきた家族がトランスジェンダーであろうとなかろうと、彼が彼であることに違いはない。にもかかわらず、受け入れてもらえないかもしれないという可能性が存在することが悔しかった。今までどれだけ苦しい思いをしてきたのかを考えれば考えるほど、やるせない気持ちになった。

その手紙を読んでからというもの、本やインターネットでセクシュアリティに関することを調べ、読み、考え続けた。今までいかに自分が無神経な発言をしていたか、狭い考え方をしていたかを思い知らされ、そのたびに反省した。

ただ好きになる対象や自分の身体の性だけで、生きづらさを感じなければならないことが「おかしい」と思う。だから、そういった生きづらさを抱えた人が少しでも減るようにしたいと思う。これは、セクシュアリティに限った話ではない。生まれた環境や人種、障がいも然りである。今の世の中は、カテゴリーが必要以上にされすぎているのではないか。もっと「個人」「ひとりひとり」を見ることができないか。「人に向き合う」とはどういうことか。そういった問いが常に頭の中にある。この出来事は、自分の考え方を変え、生きる指針を与えてくれた。

2. 授業に関して

教育人間学概論は、私が生きていく上でとてもためになる授業であった。もともと、迷い悩むことが多い自分自身の生き方について考えるために選択した授業であったが、期待以上に人生について考えることとなった。

大学外の方がご講義をしてくださったことで、小学校・中学校・高校・大学と順調に進学してきた私の見ている世界が、いかに狭く偏っているかがわかった。お話を聞いていて、「問題が解ける力」で人が評価されていることはおかしいのではないか。それが誰かの人生に大きな負担を与えているのではないか。そういった考えが頭の中をかけめぐりこともあった。また、当時就職活動中であったため、将来自分がどうしたいのか、ということを考える手がかりにもなった。自分も含め、背景や考え方、価値観、性質、すべてがそれぞれの人の固有のものである世の中で、人々が幸せに生きるために自分がどう動くことができるのか。自分にとっての「幸せ」はいったい何なのか。そういった問いに、その時その時の暫定的な答えを出していく形で、考え続けることができた。

この授業は、知識や勉強という言葉には収まらない「学び」を与えてくれた。今の私の一部分を成していることは確かである。

3. 今後の生き方

来年には就職をする私が、今までの人生の経験や3年間大学で学んできたこと、この授業を踏まえ、今後どう生きていきたいかについて記述する。

まずは、問いを持ち続けることである。教育人間学概論をはじめとした多くの講義を通して、現在の自分にとらわれない生き方をしたいと思った。そのためには、自分の内面の変化に耳を傾け、現在の状態を疑うことを恐れず、考え続けることが必要である。「なぜそうなのか」「本当にそうなのか」という問いは、自分が今生きている世界を超える力を持つと考えている。

次に、自分を大切にすることである。他者のために自己犠牲ができる人が素晴らしいと思い込んでいた時期があった。その考えを改めたのは、自分がいないと他者を想う気持ち自体が成り立たないという基本的なことに気づいたからである。自分を大切にすることこそが、他者と共に生きるための土台となる。こうした考えを基に、自分の幸せを追求する生き方を模索中である。

最後に、「個人」を尊重することである。自分も他者も、それぞれに考えがあり、背景があり、生き方がある。ときには、分かり合えないこともある。むしろ、分かり合えないことの方が多いのかもしれない。それでも、分からないからと簡単に諦めず、他者を受容し、自分の地平を広げていくことで、共約不可能だと思われることを乗り越える試みをしたいと考えている。

(さとうあかね 京都大学教育学部)